





<b>みなと元町タウンニュース</b>	2021年(令和3年)10月1日	<b>みなと元町タウンニュース</b>	第350号(3)
<p><b>海という名の本屋が消えた（95）</b></p>	<b>平野義昌</b>		

#### 元町駅周辺(1) 学校その1

諏訪山からJR元町駅周辺に戻る。駅北側は北長狭通4丁目、神戸市立神戸生田中学校がある。かつて神戸小学校と神戸中学校が並んでいた。1980～90年代児童人口が減少、近隣の小学校・中学校の統合が進んだ。90(平成2)年、小学校は諏訪山に移転。92(平成4)年、跡地に新中学校が完成した。現在同校正門北側に記念碑が建っている。上段に「神戸小学校発祥の地」の文字、校章と開校年月日(明治17年12月12日)、閉校年月日(平成2年3月31日)が刻まれている(写真)。下段は「神戸小学校校歌」歌詞(1番)「百船の集う港を見はるかし(後略)」と「若杉慧作詞 片山頼太郎作曲 平成二年三月建立」(百船は「ももふね」と読む)である。

私の興味は「校歌」と「若杉」だが、そのまゝに神戸小学校(以下、神戸校)の歴史を繙いてみる。

1870(明治3)年、アメリカ帰りの関戸由義(よしつぐ、のち兵庫県庁で都市計画担当)が鯉川筋に私塾「開山学校」を開き、子どもたちに英語・漢学・習字・算術を教えていた。平屋校舎に運動場もあった。

72(明治5)年、学制発布。神戸町(現在の中央区西部)に小学校4校(一番組小から神東小に改称、二番組小から神西小、三番組小から花隈小、それに上田小)設立。校舎は寺、塾、名士の私邸を借りた。4校生徒数は計640名。公立校開校に伴い、「開山」生徒は神東小に移り、「開山」は漢学・習字の塾になった。

82(明治15)年頃、4校生徒は計1200名を超え、統合して「神戸小学校」設立が決まる。

84(明治17)年、神戸小学校完成。総面積1550坪、校舎11棟。12月12日落成式、この日が同校開校記念日になる。4校は分校として存続したが、やがて廃校になる(4校については稿を改める)。

87(明治20)年、神戸尋常小学校に改称。

89(明治22)年、元四分校(神西小)に私立夜学校開校(1900年・明治33年に閉鎖)。

90(明治23)年、男子帽子徽章制定、「神」の文字。

93(明治26)年、神戸市立尋常高等小学校に改称。

99(明治32)年、校章制定。紫紺の地に白く八咫鏡と「神」の文字。デザインは函画訓導(補註1)戸波武五郎。前年神戸区内の学齡児童は6000人を超えた。神戸校は3600人、学級数63。中山手通に諏訪山小学校と山手小学校が新設される。

同年、兵庫県庁(現在の兵庫県公館)北側の兵庫県尋常師範学校が武庫郡御影町(現・東灘区)に移転し、御影師範学校に改称。付属小学校生徒の多くが遠距離通学になるため神戸校に転校した。転校生の回想に、神戸校生徒が付属小を「ツッパリ学校」、付属小生徒は神戸校を「丸焼け学校」と呼んでいた、とある。付属小校舎は古いので暴風雨時に丸太で支え、神戸校は火災があった(註1)。また付属小卒業生が少年時代の記憶を画文集にしている。日常的に神戸校の悪ガキ生徒が棒を持って付属小生徒下校の列を襲撃していた。教師が付き添い、棒を取り上げ神戸校長に抗議した。悪ガキ共は道路脇の工事用小石を投げつけもした。付属小生徒は抵抗せず、「隠忍冷静」を保った。註2

1901(明治34)年、長狭女子高等小学校開校、神戸校の校舎使用。
04(明治37)年、校内に私立夜学校開校。
05(明治38)年、長狭尋常小学校開校、神戸校の女兒移る。神戸校は男児校になり、尋常科6学級、高等科17学級。
07(明治40)年、ドイツ製堅型ピアノ購入、400円(補註2)。「恐らく本市小学校のピアノ中最古のものであろう」(註1)。この年、学業成績優秀により県知事から賞与50円を賜る。
08(明治41)年、義務教育4年から6年、高等科4年から2年に改正。この頃には神戸校の歴史や学力、上級校進学等により名門校の評価が高まる。学区外から汽車や市電(1910年・明治43年開通)通学者が多かった。

14(大正3)年12月、開校三十年記念祝典開催。同年6月から準備会を組織、神戸区教育沿革史編集、教育功績者表彰、児童に記念品配布、児童旗行列などを計画。「神戸区に於ける小学校の本家というべき地位」(註1)を自負、区内の学校全体の祝典とした。会場は県立第一高等女学校校庭(師範学校跡地)。終了後、区内7小学校の全生徒約1万人が小国旗を掲げ、楽隊に合わせて記念祝典行進歌を歌い行進。12時30分高等女学校を出発。山本通、諏訪山下、北野校、生田神社、三宮町を経て元町通を西に進み、宇治川から下山手校、中宮校、14時すぎに高等女学校に戻った。

「神戸小學校開校三十年記念祝典行進歌」歌詞。〈昔も今もモノノ本ノ 形勝二立ツ神戸港 校堂ココニ開カレテ イラカソバダツ三十年〉(註1)(最終句は「薨時つ」だろう)。歌詞は3番まで。資料に作詞者名・作曲者名なし、楽譜もない。祝典後は歌われたのかどうか不明だ。

26(大正15)年、神戸市立神戸尋常小学校に改称。高等科男子は長狭校に、長狭校尋常科女子は神戸校に移動。
29(昭和4)年6月7日、天皇名代・海江田侍従が視察訪問。
34(昭和9)年12月、神戸尋常小学校開校五十周年記念式。校歌製作。以上、開校から校歌制定までの歴史だ。なぜ神戸校は明治開校なのに校歌は昭和なのか。陳舜臣(3年生のとき神戸校に転校)がエッセイに書いている。〈私たちが四年生のときに、神戸校は創立五十周年を迎え、新しい校歌がつくられた。(中略)壮重な歌詞で、これが若杉先生の作詞だということも知った。〉註3

「神戸尋常小學校開校五十周年記念式」は大事業だった。教職員、家庭会、同窓会による式典委員会が組織された。記念事業として五十年史編集、児童記念品(校章と鳳凰を刻んだ文鎮)、門柱に記念文字刻印、功労者表彰、記念講演会・学芸会・運動会・映画会開催、寄付金集め、そして校歌作製が決まる。

神戸校に校歌はなかった。全国でも校歌を持つ学校は少数だった。文部省は音楽教育に「唱歌」と「奏楽」を設けたが、教師、教材、楽器など未整備で学校差・地域差があった。

その点、神戸校は恵まれていた。明治の開校式典での「君が代」斉唱が本邦初の小学生唱歌斉唱と言われる。学区内の東京女子高等師範学校卒業女性宅に女兒20余名が習いに通った。オルガンは師範学校から借用した。
1890年代(明治20～30年代)に在学した人の記録では、尋常科1年から高等科4年まで(計8学年)「唱歌」授業は週2回各30分あった。オルガンは英領カナダ製とアメリカ・ボストン製各1台あり、時々ヴァイオリンが使われた。熱心な教師たちが在職して、音楽の楽しさ・美しさを伝えたようだ。〈小学唱歌集、小学唱歌等を骨子にて主として美情的興味を起す材料が選ばれ、かの浅薄なるトントン拍子軍歌調は頗る少数採用せられし様覚ゆ。〉註1

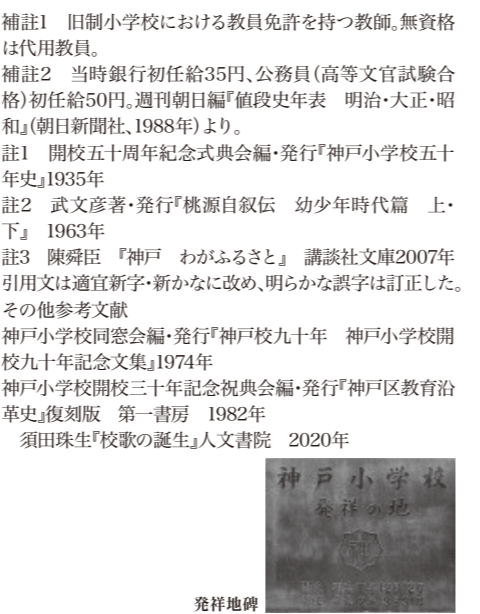
50周年当時も東京音楽学校卒業・山井基文が長く勤めていて(1919年・大正8年から勤務)、唱歌教室18坪、ピアノ、蓄音機、レコードなど設備・環境が整っていた。

学校行事で音楽はどう扱われたのか。文部省は天皇祝賀や国家的儀式の式次第を定めていた。「御真影拝礼」「万歳奉祝」「教育勅語奉祝」などと共に「唱歌」合唱もあった。「君が代」は必ず歌う。他に「紀元節」「天長節」など「大祭日唱歌」が決められていた。卒業式では「君が代」と「仰げば尊し」や「螢の光」が歌われた。91(明治24)年、東京市の忍岡尋常小学校が東京府知事に儀式用の「唱歌」として同校校歌を申請した。文部省の訂正要求を受け、93(明治26)年に文部大臣が認可し、学校行事で歌えるようになった。

明治末になると校歌の申請・認可が増える。「唱歌」を校歌にした学校もあった。作詞は地元の文化人や校長でも可能だろうが、問題は作曲。1907(明治40)年頃から多くの学校が東京音楽学校に校歌作製を依頼するようになる。当時唯一の官立の音楽学校だ。依頼する方は優れた歌を望む。著名な作詞者・作曲者に作ってもらいたい、地域の自然・風景・歴史、学校の教育方針などを取り入れたい。

神戸校・中山直太校長の方針は、〈校歌は活きた校是校訓として永久に伝うべく、以て日夜児童の心魂を陶冶し情操を高むべき性質のものである。／わが校はここに創立五十周年を迎うるにあたり之が制定を志し、記念事業の意味に於て歌詞は本校内に於て制作し、曲譜のみを専門家に委嘱するの趣旨によった。〉註1

若杉が作詞を担当することになった。
補註1 旧制小学校における教員免許を持つ教師。無資格は代用教員。
補註2 当時銀行初任給35円、公務員(高等文官試験合格)初任給50円。週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社、1988年)より。
註1 開校五十周年記念式典会編・発行『神戸小学校五十年史』1935年
註2 武文彦著・発行『桃源自叙伝 幼少年時代篇 上・下』1963年
註3 陳舜臣『神戸 わがふるさと』講談社文庫2007年引用文は適宜新字・新かなに改め、明らかな誤字は訂正した。その他参考文献
神戸小学校同窓会編・発行『神戸校九十年 神戸小学校開校九十年記念文集』1974年
神戸小学校開校三十年記念祝典会編・発行『神戸区教育沿革史』復刻版 第一書房 1982年
須田珠生『校歌の誕生』人文書院 2020年



<b>みなと元町タウンニュース</b>	2021年(令和3年)10月1日	<b>みなと元町タウンニュース</b>	第350号(3)
<p><b>みなとMOMACHケンチクさんぽ vol.3</b></p>	<b>公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部</b> <b>兵庫地域会 地域まちづくり委員会</b>		

## まちの片隅の小さな存在

2015年、神戸市が都心の未来の姿[将来ビジョン]を策定する際に、神戸で活動する建築家としての意見をまとめよう、と呼び掛けてもらったことをきっかけとして、その後乙仲通界限でのワークショップ等にも関わり、私は活動拠点としている神戸北部の農村地域から度々元町地区を訪れることとなりました。

農村の移動手段は専ら車なので、山を越え、トンネルを抜け、山手幹線から坂を下りきったあたりで車を止め、そこから目的地まで歩いていくことが多いのですが、市営の花隈駐車場が安くて便利なのでよく利用します。

用事を終え、帰りみち、JRの高架下を抜けると駐車場入り口に面して登り坂があります。花隈城址の石垣に沿った歩道は公園の樹々に覆われ、曲がりくねった坂のその先は見えません。ここをほんの少し登ったところにお地蔵さんが祀られているのをご存じでしょうか。

路傍に佇む小さな地蔵が、さっきまで歩いてきた直線的な通りや建築群からなる、賑やかで華やかな商店街とはかなり様相が異なるこの場所をさらに特色づけていて興味深いです。

今回は、この界限にあるお地蔵さんを巡り歩いてみることにしました。

基壇に「長狭北向地蔵尊」の銘板が付けられたこの地蔵(写真①)の玉垣には、複数の料亭の名前が刻まれています。花隈はかつて150軒を超える料亭やお茶屋が並ぶ一流の花街で、伊藤博文ほか歴代の総理大臣をはじめ、多くの著名人が訪れたそうです。このすぐ近く、



.....

### みなと神戸は坂のまち

花隈周辺は坂道だけでなく、南北方向だけでなく東西方向にも結構な勾配の坂があります。曲がりくねっていたり、上ったかと思ったら下りになったり、突然階段が現れたり、電車が眼下を行き交ったり、...

マンションが多いのですが、まち自体が迷路のようで、歩いていて退屈しません。ここが盛り場だったころ、坂道の傾斜に沿って並んだ料亭や置屋の行燈が灯っていた光景は、どんなに美しく楽しかったことでしょう。

神戸の[将来ビジョン]には、坂道について

坂の途中にある厳島神社の玉垣にも「花隈芸妓協同組合」と刻まれています。花街の多くの女性たちが下駄を鳴らしてこの辺りの坂を上り下りし、お地蔵さんにも手を合わせていたのでしょうか。

そこから東方向にある兵庫県警本部の敷地の南西角には、不動明王像が建っていて、その足元にいくつもの小さな古い石仏があります。お社の両脇に地蔵があり、その周辺にも複数の石仏があります。(写真②)規模が大きい割には何の説明板もなく、どんな縁起で誰が管理しているのかは分かりませんが、毎年地蔵盆で賑わっているようで、掃除や供え物などお手入れも行き届いています。

兵庫県庁の北東角、山手幹線を挟んで向かいにある地蔵(写真③)の基壇には「老人クラブ中四長栄会～昭和六十一年六月吉日建之」と書いてあります。なるほどお社も中の地蔵も比較的新しいようです。毎月第一日曜にお地蔵さんの前でラジオ体操とその後のコーヒープレイクのイベントを開催しているようです。

山の手小学校から掘割筋を下って山手幹線に交わる場所にある地蔵(写真④)には「掘割地蔵尊～平成十四年吉日」と書かれています。隣にある山手自治会の掲示板には「第61回地蔵盆開催のお知らせ」が貼られていました。

走水神社から数十メートル西方面、走水通に面して、ちょうど人の目線と同じぐらいの高さに小さなお地蔵さんが安置されています。

(写真⑤)個人住宅と思われる敷地の塀に接し

ています。水やりや花の交換はこちらの方がされているのでしょうか。だとしても、お社の扉は通りに対して開かれ、前を通る誰でもが手を合わせ、祈ることが出来るような設えです。

メリケン波止場前、みなと公園の南西角に建つお堂にはメリケン地蔵が祀られています。(写真⑥)説明板には阪神淡路大震災からの岸壁の復旧工事のため一時移転をしたあと、平成9年に元のこの位置に復帰したいきさつが書かれています。地蔵盆の寄付協賛者名簿もあり、多くの個人、事業者、商店街等の団体からの支援を受けていることが分かります。

他にも三宮センター街の繁盛地蔵尊、北長狭通のビルにある北向地蔵尊、不動坂とパールストリートの交点にある叶地蔵尊など、有名な地蔵が三宮近辺にもあり、それらのご利益について書かれた史料も多いようです。

このように、つくられた時代も管理する人や団体もさまざまなお地蔵さんが市街地の中に点在しています。名前もないお地蔵さんが路地の中にもっとあるのかもしれない。

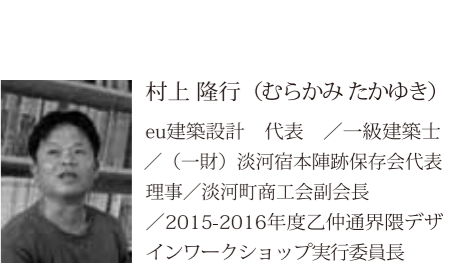
先の神戸の[将来ビジョン]には、地蔵のことは書かれていません。その存在はあまりに小さく、大きな「ビジョン」にとっては検討に値しないものかもしれません。しかし、これら地蔵はこれまでのように、時に移動し、時に再建立されながら、林立するマンションの寿命が尽きたその先も長く存続するでしょう。

そのような、小さいけれど、まちの記憶を喚起させてくれるような地蔵たちを探しながら、まち歩きを試してみるのも楽しいのではないでしょうか。



.....

えずにはいられません。ただ、坂のまちがこの先どのように計画され、姿を変えていこうとも、地蔵は都市の隙間を縫って存在し続け、擦り減った柔らかな表情でまちを見守り続けてくれることでしょう。



村上 隆行（むらかみ たかゆき）eu建築設計 代表 /一級建築士 /（一財）淡河宿本陣跡保存会代表理事/淡河町商工会副会長 /2015-2016年度乙仲通界限デザインワークショップ実行委員長